



シンポジウム開催報告

2008年2月28日

言語教育情報研究科

立命館大学大学院言語教育情報研究科主催で、平成19年度大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）において採択された「国際通用性を高めた言語教育専門家の養成」プログラムの企画としての講演会及びシンポジウムを以下の通り実施しました。

日時：2008年2月2日（土）14：00～18：00

場所：立命館大学 衣笠キャンパス カンファレンスルーム

成果：第1部では、研究科長の挨拶、副研究科長によるGPプログラムの紹介に続いて、UBCの言語リテラシー教育学科教授のケネス・リーダー教授による講演、“The Ritsumeikan-UBC Joint TESOL Program: An International Perspective”がありました。リーダー教授は、言語習得やバイリンガリズムの研究者であるJim Cumminsの学説を裏付ける形で、立命館大学の院生が、カナダのUBCの学生に遜色ない到達度を示していることを、具体的なデータに基づき説明し、複数言語学習の持つ学力伸張可能性を強調しました。

第2部のシンポジウムにおいては、中村純作教授の司会のもとで、TESOL プログラムに参加した言語研院生や修了生、また京都府教育委員会の指導主事の先生や現職の英語教員や日本語教員の方々がパネリストとして参加・発言し、多様な角度から国際通用性とは何か、またそれを、今日の学校教育現場でどのように生かすべきかといった問題が議論されました。5人のパネリストの問題提起と、コメンテーターとしても参加されたリーダー教授、教職課程教室の湯川教授からの指摘などを契機に、会場からの発言も受け、活発な議論の中で、司会者のまとめにより閉会しました。